第3号
1995.12. 7

ゾーン・システム研究会々報

Photographic Society of Zone System

発行者
中島 秀雄

編集部:東京都港区西麻布4-2-10東城ビル401 ゾーン・システム研究会事務局

平木 収 先生 講演会 特集Prt2

※平木先生の講演は、いよいよ核心部分に入って行きます。 各、写真家がどのような道をたどったか、そしてどのような影響を受け、また与えて来たかを、幅広い歴史の中から探索し色々な分野の芸術家からその描写を含めた内容を解り安く語っています。

※1995年3月4日(早稲田奉仕園にて)

【講演内容】

マルセル・デュシャンの仕事はニューヨーク滞在に於いて、その展開は図れないですね、そう言う意味では、スティーグリッツは非常に面白い人で、一旦アメリカと言うものを引き受け地みたいにしておいて、そこでまた引き受けたら、日本が原料を輸入して加工して輸出するみたいに、してしまった人です。そこでアメリカのアートに於ける主体性みたいなものをヨーロッパに対して始めて発揮したので、アメリカも遅るんだよ、みたいな感じですね！それでスティーグリッツはアメリカの現代芸術の父と言う、とらえ方をされています。と言うことは、ヨーロッパとの関係に於いてアメリカは、様々に形作られて来ました。それは国家そのもの、あるいは政治、経済と全てにそうだと思うんです。例えばアンセル・アダムスと芸術感と言うのは、僕はある時、拙い文書で小っちゃなパンフレットを書いた事があるんですけど、何に原点があるかと言うと僕はアンセル・アダムスは音楽だと思うんです、クラッシック音楽ですね！それは多くの人が言っている通りなんですけど別に、私が最初に言った分けでもなく本で知った事で、作品を見て、つくづくそう思うんですね！ 彼が抱いてた夢というのはクラッシックのコンサート・ピアニストになることだったんですね。コンサート・ピアニストは単にピアノが弾けるということではなく、ベートーベンとかショパンとかシューベルトの世界を音楽と言う極めて抽象的だけど極めて不変的な表現を作曲家から時代を越えて受け取って、それを自分の物にして社会に投げ返す仕事なんです。そのように作品行為と言うか、つまり社会の中に、単に参加して行くのではなく、一つの宇宙を作って世界を作って行こうよと、投げ出す仕事なんです。これは、かなりクリエーションと言う概念がハッキリ自分の中で固まらなければ出来ない仕事だと思うんです。日本のクラッシックの演奏家ですが、この頃、素晴らしい人も出て来ていますが、前は技法は良いけど、なかなか音楽性の問題、いわゆる芸術性の問題で海外で伝統ある国々の人達と比較出来ないと言われたのは、そのへんだったと思うんです。その点は、アンセル・アダムスが覚えたのは、最初にビジョンを一つの世界に、まとめ上げる事だと思うんです。彼が、そのような訓練を積んで来たおかげで、シェラ・ネヴァダ山脈へ病気療養で入って行くんですけど。非常に完成度、あるいは密度の高い風景写真を撮る事につながって行ったと思うんです。そう考えてみますと音楽の世界は、明らかにヨーロッパのイタリア、どいつ、あるいはフランス及び、その周辺国、ロシアもそうですけどね！そこで形成された、伝統的にもギリシャ、ローマの伝統から中世グレゴリオの流れを積んで成立して来た文化ですね！そう言った意味ではアメリカがヨーロッパ文化の一つの連続線上にあるものを示しています、これがアンセル・アダムスの美学だと思うんです。そう言った意味で今日は、先程お話ししたように、ウォーカ・エバンズを見る前にウォーカ・エバンズが影響された人、それからウォーカ・エバンズ以降そして、これがどのように展開しているのかを見て行こうかと思います。ウォーカ・エバンズが一番、影響を受けた人というのは、ご存じでしょう ユージェーヌ・アジェ(1857～1927)、そしてアウグスト・ザンダー(1876～1964)なんです、ドイツの肖像写真家ですね！それでウォーカ・エバンズはアメリカ人ですがパリ大学、いわゆるソルボンヌ大学と言われておりますパリのソルボンヌにあるソルボンヌと言うのはカルチェラタンと言う小さな地域がありまして、そこの教会の名前の大学に留学し、卒業しています。そして帰ってからアメリカを再認識して、しっかり写真を撮りだすんです。ウォーカ・エバンズにプッシュされて、大きな仕事をしたのが今、横浜で写真展を行っているロバート・フランクなんです。それでフランクさんは、いやフランクなんて偉そうに言うことはないんですが、結構、幸せにもなんとか、お話しをさせてもらってて中村屋のカレーを、おごってもらって色々義理もあるし、プリントも、もらったんですよ、でも自分の物にしませんでした。お前にあげるって言うから、いや僕、今キューレーターだから僕の美術館でいい…そうか…じゃーそうしよう、と、言うので"For Kawasaki City Musium Robert Frank"と書いてくれましたけどね!いい人だな僕は、Flower isて言う、花が一輪咲いているあのボヤボヤのボケボケの写真なんですけど、今の横浜のカタログにも出ていますけど、あの写真もらったんですけどね！フランクはスイス生まれで、スイスから移民というかたちでアメリカに入っています。 まぁ移民でもないですね！ あのかたちを見ると、僕らが若い時に故郷を離れて東京に出て来たような、そうゆう雰囲気ですよね、それでアメリカ人と言うタイトルの写真集がありますけど、あれはヨーロッパ人がアメリカを見たアメリカ人を描いた訳です。アジェと言う写真家のことはだいたいご存じかと思うんですが、なじみのない方の為に少し解説させて頂きますと、グロメールのジャン・オーギスト・ユージェーヌ・アジェと言いまして、ジャンとアジェは解りますがユージェーヌとかオーギストが、その順番だったかどうかは僕もちょっと自信がないんですけど、オーギスト・アジェと通称呼ばれています。フランスの写真家です、1857年 1856年と言う説もあります、ボルドーの近くのリブールノと言う町で生まれまして、その後、父親が死んだり母親に捨てられたりで、つらい生涯を歩まなければなりませんでした。10歳代にボルドーからパリへ出稼ぎに行きます、その後、船の給仕をしたり、あるいは、そこで貯めたお金で演劇学校の潜り学生になったりして、最初はクラッシックな演劇

をする、どさ回りの劇団の脇役専門の役者になるんですね、ところが長い事これをおこなったんですけど、才能の限界を見極めて、30歳の中頃か後半位に役者を辞めて画家になろうとします、画家になるのも才能とか門閥社会で家が良いとか、後継人が良いとか、パトロンが付いているとか、そうでもないとフランスでもなれなかったんです、日本でもそういうところがあります、例えばユトリロと言う画家がいます、ユトリロは、お母さんが有名な画家だったので、凄い飲んだくれで画業が続けられたんです、何処の馬の骨ともしれないような人が画家に成ることは、なかなか大変だったようです、その証拠に才能が認められながらも、生前には売れなかったオランダ人のバン・ゴッホがいます。バン・ゴッホはロート・レックと言う画家と一緒にコルモンと言う先生のワークショップに通っていました。ロート・レックは、バーやキャバレーの楽屋に入り浸って、そこで酒を飲みながら絵を画いてて、結構、生前からちゃんと、ちやほやされてた分です。彼はアルビと言うところに、お城があるトゥルーズと言う地域の貴族の伜というか領主り伜だった分です。そのように不良してても、名前が出て行く人、あるいは才能が有っても生前は名前が出ない人、画家にもいっぱいいた分です。と言うことは画家というのも社会の制度の中に旨く入って行ける足掛かりが必要だったとアジェにはそれが無かったんです。これが写真の世界に関しては幸するんですけど、アジェは役者としても画家としても駄目だったので、写真の世界に入って来ました。そういうこと言うと写真が逃げ場所みたいになるんですが、実は写真は絵心を満たしますよね、それから写真というのは、創作、制作行為だけではなく、一種の記録技術の分ですから、科学技術です、これを扱える人間は技師ですからテクニシャンですね！一種のエンジニアですから、それで、お金を稼ぐことが出来るんです、それでアジェは自分の絵心を満たし、なおかつ生活費が稼げれば良いト言うので、1890年代末から画家の為の資料写真、画家の為の下絵写真、あるいは歴史の為の写真、小説家の為の記述描写になる写真を撮る仕事を始めます。自分の写真は、アジェ作品として表に出なくても良い、画家の絵の下に潜り込めば良い、小説の中に埋没してしまっても良いし、あるいは歴史資料として、偉い歴史家の黒子になれば良い、そう言うふうな認識で、まったく自分を殺した形ですね！そういう写真師を目指して日々を送るようになります。これも結構面白い背景分析が出来るんですけど、アジェの時代にパリには、かなりの数の写真館がありました。もちろんナダールの写真館は、その頃もやっておりましたし、ポール・ナダールの代になって、かなり手広く仕事をしたはずです。ナダールはフランスで最初に大規模な商売に成功した写真館で、最初の写真館ではなく、写真館として歴史的には後発組ですが商売の上手さでは19世紀唯一と言う写真家ですね。フィリックス・ナダールと言いましたけど、写真館というのは権威のあるもの、上流社会に属するような雰囲気があったんです、芸術写真を撮る人がいました。それは実はアマチュア写真家です、アジェが写真を始めた当時、一番活躍したのはフランスではコンスタン・フィリョーとかロベルト・マーシーと言う人達です。これは銀行家であったり位の高い軍人だったりした分けです、と言うことは経済的にも非情に恵まれた人間達が趣味としての芸術技を行ってて、写真界というのは、そういうイメージで固まっている分けです。写真館だったり、芸術写真の人だったり、その写真界にデビューするつもりはなかったんです。画家の世界がだめだったように、そういう側面から写真界を攻めたってだめなのはアジェには良く解っていたんです、アジェと言う人は面白い人で、子供の頃にお金が無いので入れられた学校が神学校だったんです、神学校は神様の学校です、神学校の寄宿舎に入って進学して行くと、いずれ神父さんになるんですね、神父さんになれば神の為に一生を、その仕事に捧げる分けですから、神学校というのは基本的にお金を取らないんですね！但し、勉強は非にハードで神学とか哲学を大きくなったら行うんですが、その為にギリシャ語とかラテン語の勉強を強いられます。それからフランス古典、古典文学、古典戯曲みたいなものを読んだり、研究させられたりするんですね！そうゆうふうに一般の小学校とか中学校よりは古典的な側面で、ませた教育を受けたんです。その影響が残ってまして、アジェは貧乏人の割りに古典が非情に好きだったんです。 貧乏人が古典を好きになってはいけないのか、と言うことが出て来ますけど、普通そうゆう余裕はありませんよね！ 生活に追われていると、私は古典ぜんぜんだめです、日本の普通の貧乏人だったりして、それでパリという町にも彼は独特の哀愁を感じていたんですね！丁度、彼が写真を始めた頃のパリというのは、万国博を何度か重ねて産業革命が一応軌道に乗ったところで、19世紀的なパリから20世紀的パリに様変わりしようと頃なんです。ましてや丁度100年前、つまりフランス革命でブルボン体勢が倒れて新しい市民主導型の社会になって、また更に変わろうとしている。そして彼の住んでいた19世紀の末のパリに19世紀以前、18世紀、17世紀のパリを何処かで感じようとしていたんですね。それは古典への憧れでパリを古典的な都市としてとらえる、と言う気持ちにして行った分けです。僕らでも日本の古典の平家物語を、ちゃんと読んだことないですけど、平家物語を読んでいると、京都の都王寺というものが、やはり三十何階建てのビルが建たない方がいいなとか思うんですよ、そのように、ある種、文学的な共感だとか、そういったことから景観、景色へ求めるもの、と言うのは生み出されてくると思うんです。それでアジェは文学的な素養の方面からパリを、かなり古典的に捕らえようと、アーシャンレジュームと言う言葉があります。旧態性の時代のことです、そういう見方で捕らえようとして見て行きます。但し、そうは言ったって都市ですから、そんな都合よく古典的なことばかりではないんですね！ 今あるものも面白いし、予感を称えているところも面白い、そういうところをアジェは画家になろうとしたぐらいですから、この景色を画くよ！そう言う感じで写真を撮って行く分けです。モンマルトの丘は今でも殆ど変わらないと言うとおおげさですが、こういう景色に出会うことが出来ますがアジェが撮りましたモンマルトのサクレクール寺院の脇です。

あのサクレクールという丸い屋根の白い寺院がパリにあるんですけど実はアジェが撮った時、 この寺院は新しい名所だったんです、出来たばかりでした。都市改造以前の古いしもた屋の後ろにサクレクール寺院がそびえ立っています。これなどは、いかにも画家が好みそうな感じです。それと古い物の対比でアジェが抱いていた哀愁感を訴えようともしていますね!これはアパルトマンです。あまり裕福な人が住んでいないアパートです。この写真が面白いのは結構、人が一杯写ってるんです。 この辺に子供が要たりするんですよ、ここにも居るんですよ、それで結構アジェは背が高かったらしいです。変な男が来て三脚の上に８×10のカメラを乗っけて、アジェは殆ど８×10に近いサイズです。それで写真を撮るんですね!そして子供に引っ込んでください、と言ったんでしょうね！でも向こうから見ているんです。何しているんだろうね!あの伯父さんという感じで、大体怪しげですからね！今でもいきなり三脚立ててカメラ出してカブリかぶって写真を撮り出すと回りの人がなんだろうと思いますよね。第一次大戦中、彼はその辺で写真撮っててドイツのスパイと間違えられて拘留されたことがあるんですよ!それが嫌で、その事件後、写真を撮らなくなったんです。こうゆうふうに生活実感がある物も撮っています。アジェも1927年に70歳で亡くなるんですけど、亡くなった時はほんとに天涯孤独、アメリカ人の若い娘が遺品の整理をします。ゲレニス・アボットと言う女性写真家です。ほんとに天涯孤独で今頃、東洋の偏狭で、こんなレクチャーの所で自分の名前がぼんぼん出るなんていうのは絶対考えていなかったし、ましてや自分の作品がビンテージだったら1点 300万 400万になって取引されるなんて考えも見なかったと思うんですよね!こうして絶えず町の中を撮って行く分けです。ここには写真の記録性だけでなく、撮るというとでなく、写す人間のその場のエモーションだけではなくてアジェと言う人間がず～と歩んで来た道のりが、どこか投影されているんですね！ それは苦しい生い立ちというか、出稼ぎに行った父親がパリから帰らなくなったと思ったら死亡通知が来て、それを見た母親がまだ若かったので、父が子供を置いて家出しましてね！お祖母さんに預けられて、お祖母さんが死んで伯父さんに引き取られて、伯父さんと一緒に食えないからパリに出稼ぎに行こうと言って、パリに引っ張り出されて、そこで放り出される分けですね。そのようにして、ず～と不幸な人生を歩んで来たけれども、どこか心のより所として古典があったり、演劇と言う夢があったんですね！ それをやってみて失敗する、そして絵かきになろうと思ったくらいですから絵が好きで、それだけ辛い思いをして来て生きることだけで精一杯だろうと思うんですけど、やはりクリエーションというか、いろんなものを感じたものを自分の胸の内に一旦取り込んで、それを又、出して行きたいという表現本能というか人間の持っている芸術的天文みたいなものを感じさせられるんですよね、 それと同時に見つめる事の面白さというか、結構アジェは楽しんでやってる感じがするんですよ、これは有名な写真でもあるんですけど、店の入り口を撮ったシリーズの一枚で、アジェは闇雲に写真を撮っていないんですよ、全然自由ではないんです。自分に対して非常に不自由な撮り方をしています。何かと言うと、皆んな大義名分というか、こういう写真はこういう人の為になるだろう、こういう人が買ってくれるだろうと、いちいち自分に言い聞かせているんです。このシリーズは店の入り口の装飾を作ったりする人が参考にする為に買ってくれるだろう、というシリーズなんですよ、たしか、そしてこれは帆船が写っていますね!この写真の面白いのは、あそこに立っていたボーイが途中で声が掛かったのか、何処かにいっちゃってですね、ポーズしているはずの、立ってたはずのおやじが、それで幽霊みたいになっちゃったんですけど、あそこにはスィター、ノルマンディーからリンゴ酒が届きました63チームです。という看板が出てたりして結構面白いですけど、眼目は船と回りの装飾なんですよ、これは鹿のいるお店の入り口ということなんですから、いちいち結構楽しめる写真なんですね！僕は、パリって言うことだったり、アジェって言うことを楽しんだりする分けです。ところがアジェの目論みとしては意匠を売る事だったんです。この辺は歴史家が買ってくれたり、小説家が買ってくれたり、画家が買ってくれるのを見越しての撮影ですね！ですから自分の為の自己表現としての写真ではないですね、どちらかというと対象をどう捕らえるか、対象をドウキープするか見たいな事が多いです。ですから画家の為の秀作につながるようにということで、これはベルサイユの方の池だったと思いますけども、これは有名な大きな建物の前の広場の噴水ですね！建物を撮らすと様子が良いというか。ただ資料写真ですから安いんです彼のは当時ね！そして右上左上に黒い陰りがありますけど、あれは皆さんすぐにお解りのようにケラレです。それで彼は貧乏人ですから凄くイメージサークルの狭いレンズを使ってんですよ！ 口径の小さい、それで尚且つアオリでライズするから、どうしてもケラレが出ちゃうんですね！これも良く見ると窓の中に伯母さんがこっち向いてたりするんですね！これは比較的、日が高くなってからの写真ですけど、結構、朝早くが多いんですね！これは普通の民家の軒先を撮った物ですけどね！ 花とか植木とか、そういった物を、ちょっと玄関にあしらってあると当時の人の生活ぶりも分かりますけど。 現在、日本にも多くの建築写真家がいらっしゃいますけど、その辺の方と比べても結構上手ですよね！僕らはそう言う基準を持っていますよね！中島さんどうですか？アジェの建物の撮り方は、プロレスラーの上田馬の助にそっくりな田中 長徳と言う人がいましてね！田中 長徳はアジェが大好きで、わざわざ今のレンズはケラレがないので一生懸命にケラレを出して撮影してましたね！それで僕はパリに行く楽しみの一つは、やはりアジェに行くようなつもりがありますね！今でも、そういう風に資料として写真を売り買いする仕事というのはアジェが最初ではないんです。それでアジェみたいに有名にならなかった人で何人かそういう仕事をやった人が買っていたんですよね！最近ここ10年程の内に、そういった人達の仕事が非常に高く評価されるようになりました。例えばシャルル・マルビルと言う人がアジェを去ること50年程前にパリの改造計画の時の記録写真を撮ったりしてますし、それから画家の下絵は江戸川きね！と言う人だとか、サマンと言う人達がアジェより25年程前に、やはりそういう仕事をしているんです。 アジェもそういう仕事がある事を、まったくの相異で、立ち上げたのではなくて、ある種のフランスの社会の伝統としての微々たるもんだけ根づいてたと見るべきだと思います。その中で生活が、フランス人と言うのは、実は凄く現実的、実用的なことを重んじる特質があります。もの事がハッキリしていなくてはならない、クリアリティと言いますけど、理屈がはっきりしていなければならない、と言う事がおって、アジェは、そういう一つのフランスの文化的な社会的な批判を自分に言い聞かせつつ、仕事をしたんですね！ だ回りから見ると、ただ変な人だったと思いますけどね！造形的作品を見ているとアジェを見てると言う感じになるんですけど、彼としては、そう言うことでなくて色々や

ってますという事だったのではないかと思います。桜かな、木が一本、どういう解釈をするべきか、これは色々あるんですけど、電気機関車の模型を売っている所に行くと、レイアウトといって駅舎が売っていたり、柱を売っていたり、山まで売っていますね！　それから伊東屋に行きますと、建築設計の人がコンペに出す模型を作るんで、そこに木を売ってたりしてますね！あれと同じなんですよ！画家が木を画く時、木の写真がないかしらと言う、これ部品なんです。人物なんかも、こういう形で撮ってます。これは公園ですね、これもですから非常に風情が必要で、公園がないかしら、と言われるので、今のフォトライブラリーと言うのがありますね！あれに近い感じが確かにあるんです。これは路上の伯父さんいないかしら、これをモンタージュして行けば良い分けです、画家としては、そういう使い道だったんですね！！… おわり

※平木先生の講演は当日、スライドを見ながらの講演でしたので、参加されていない会員の皆様は想像していただけたでしょうか？

中島 秀雄 写真展(River)が盛況の内に終了

※1995年11月7日(火)～19日(日)代官山のギャラリー・オリーブで行われました中島先生の写真展(River)が無事盛況の内に終了しました。期間中、お忙しい中、多くの会員の方に鑑賞して頂き感謝しておりました。

ARLES NEWS FROM FRANCE

※ゾーン・システム研究会事務局にて井口 喜正と一緒に仕事をしております吉田 公子がフランスへ留学して、早2ヶ月を過ぎました。彼女より留学先の学校から現在の状況をFAXにて発信して来ましたのでご紹介致します。

アルル通信 FROM エコール・ナショナル・ド・ラ・フォトグラフィ

発信者：Kimiko YOSHIDA　　フランス国立写真大学　　VO 1

【ECOLE・学校】

それでは学校のことをお話しいたします。

10月9日始業式です、朝9時にサル アンドレ・ケルテスと言う名前がついている部屋に上がりディレクター(校長先生)を待ちます。私は3年生に入学したので3年生と共に名前を紹介され、皆と顔見せです。その後セミナーの選択と単位とディプロムの取得の説明があり、その日は午後、学校見学で終わりです。学校の設備は1年の部屋は(サル カルティエ・ブレッソン)2年の部屋は(サル アジェ)3年の部屋は(サル アンドレ・ケルテス)があります。各部屋はキーカラーがあり、サル カルティエ・ブレッソンは黄色、サル アジェは赤色、サル アンドレ・ケルテスは青色といった感じで、一目で分かるように色分けされています。フィルム現像は、E-6 C-41 D-76と各種全て無料サービスで次の日に仕上がります。材料もフランスの市価の半額で全て手に入るシステムで、フジを除いて全てあります。現像の暗室もフィルム現像は白黒用、カラー用と、それぞれ何時でも使用出来る設備になっています。　又、引き伸ばし機もライカ、フォコマート、オメガが主流で、それぞれカラーヘッドも付いており、35mm　4×5　6×6等、それぞれ自由に使用できます。8×10サイズも引き伸ばし機があり(オメガ)レンズも210mm 360mmが自由に使えます。　又、カラーの自動現像機、チバクロームの現像機、全て自由に使用でき、9時から23時までフリータイムです。又、図書館はウィリアム・クラインの東京など、かなり多くの資料があり、美術史書、写真史書、評論集、又、各作家ごとに資料目録など好きなだけ見ることが出来ます。又、図書館当番のペルメナンスがあり、各学生が、その管理をします。メディアテックでは学生のREUNION集会がありスライド、ビデオ等の資料を自分的に学生が作り、次回アルル写真祭に向けてプレゼンテーションし、担当者を決めて行きます。学生はコダック、イルフォード、アグファ等の企業研修があり、それも学生同士の話し合いで決まります。このように学校は先生が一方的な指導者と言うよりは生徒の自主性によって動き、それを先生がサポートするという性質です。これは本当に素晴らしいことで、皆、生徒達は真剣に向かい合い、お互いを研いていくような姿勢をもっています。積極性と自主性によって人が自ら学というのが、この学校の教育のような来がします。もしかしたらフランスの教育の在り方かもしれません。と言う分けで留学というのは語学の完璧さ？が必要なようです。私はあまり勉強しなかったのでチャームでカバーです。学校の友達は、日本に興味をもっているようです。文化の深さと、美意識がどうもフランス人のハートをつかむようで…日本食も美味しいとか…。一番仲の良い素敵な男友達がいるのですが、(もちろん　とても素敵な彼女がいます。)ベルナール・フォコンの助手とかで、ブレッソン　プリントの事など、とても話しがはずんだり、エルベ・ギベールの書籍と写真の話しなど、フランスに来て良かったと思う毎日です。　　それでは　オルヴワール

会報への情報募集

☆ゾーン・システム研究会事務局では、会報への掲載の為の情報を募集しております。　活動の合間は、会報が皆さんとのコミニュケーションをとる為のものになりますので、どんな事でも結構です、活発な投稿をお願い致します。最近の個人的な活動でも結構です、会員皆様の一人一人が、この会報をもり立てて頂けますよう是非宜しくお願い致します。

ゾーン・システム研究会第２期総会決定

☆研究会も、1995年1月29日に発足してから、まもなく第２期を迎えることになりました。1996年度はゾーン・システム研究会として本質的な活動に対しての話し合いを総会にて行いたいと思います。まだ会員全員が揃ったことがありませんので、この機会に出来るだけ多くの会員の方の出席を研究会として希望しております。

出欠席のはがきを同封しておきましたのでゾーン・システム研究会事務局までお送り下さいますよう宜しくお願い致します。

日 時：　1996年2月4日(日)

場 所：　早稲田奉仕園(地図参照)ＪＲ高田馬場駅から地下鉄東西線で早稲田下車５分又は、バスで早大正門行き西早稲田下車2分

時 間：　PM2:00～PM5:00

☆総会が終了しましたら、場所を換えて有志のみで親睦会を行いますので、ふるって参加して下さい。

展覧会を終えて1995-11-7~19

およそ2週間に渡って行われた私の展覧会はゾーン・システム研究会会員の応援もあって好評の内に無事、終了することが出来ました。ほんとうに有り難う御座いました。ギャラリーの方からも喜ばれ、私としては正直にいってホッとしているところです。また経済的にも難しいこの時期にプリントを購入して頂き、この面でも皆様に協力して頂きました。当初の目標を上回りギャラリーにとっても今後のアートの動向や運営を見る手掛かりになったのではないかと自負しています。なにしろ今まで写真展は一度も行ったことがなく 絵画、彫刻、工芸品、墨絵、版画、等に長くかかわって来たギャラリーにとって私の展覧会を行うことにはちょっとした冒険でもあり、まして白黒写真となると今まで色や形にこだわって来たギャラリーにしてみれば難しい面があったと察するあまりです。何故ギャラリーが写真に興味をもちだしたのか私はここが面白かったのです。ギャラリーはあまり多くを語りませんでした、しかし私は何回に渡って話をしました、写真は記録を越えて、もはや究めて個人的な解釈と、見つめ方の結果であってカメラは道具にすぎないこと、オリジナル プリントは版画と同じか、それすら越えた作家のデリケートな内側の表出であるがゆえにタブローとしての価値は無視できないこと、ネガがあることによって美しいものが何枚か出来ることが写真の価値だ等。今回の成功は私にとってのプラス面ばかりではなく、写真ギャラリーが一つ増えたと考えれば、多くの写真家が個展のチャンスが増えたとも考えられます。事実、写真展開催の問い合わせがあったと聞いています。

今回の作品は2年程前に、ほぼ終えていた作品であって、或るギャラリーに預けていたという経緯は以前皆様にお話した通りです。その為、新たにギャラリー捜しに動き回らなければならず、時期が時期だけに展覧会の難しさを改めて感じさせられました。一年待ってほしい、面白い作品だけど傾向が合わない、前に行ったギャラリーで、やったらいいんじゃないの、あのギャラリーならやってくれるんじゃない等、プレゼンテーションに回ったギャラリーでの最後の一言です。もちろん、お金を払えば開催してくれるギャラリーは沢山あります。現に、そのように行っている作家も沢山いますし定期的に個展を考えるなら、そのほうが確実です。友達の画家も、そのように行っているし個展の為の貯蓄もしていると言っていました。しかし私は、これでは作品に対する客観的評価は得られにくいと考えています。企画で行うことは少なくともギャラリーに認められたと言うことを意味します。しかも販売することを考えている作家にとって、これは大変デリケートな問題でもあり、この事がクリヤー出来るかどうかで個展に取り組む意気込み、今後の作品作りや作家活動に大きな影響を与えると思うからです。

今回の個展では積極的に取り組んだ事が三つあります。一つは木のフレームにしたこと、もう一つはパンフレットを作ったこと、そして平木 収先生に序文を書いて頂いたことの三つです。当初は標準的なアルミニュームを考えていました。これは白黒写真の標準的なスタイルになっていて、だれもが、このスタイルで発表して来ています。また経済的なリスクも少なく、写真をシンプルに見せて行けるということから好まれて来ました。しかしギャラリーとの展示の打ち合わせのときにアルミのフレームを見せたところ簡単に否定されてしまい、少し面食らってしまいました。ギャラリーとしては私の写真を見た時に、すでに展示のイメージは出来ていたようです。そんなことから木のフレームを捜すことになり、私は直ぐさまアメリカにある写真の仕上げや保存に大きな経験と力のある“ライト・インプレッション”へ問い合わせをしました。しかし希望するサイズが無く、しかたなく知り合いの画家に相談したところ、新潟の方で作った木のフレームを見せてもらい発注したのです。素晴らしいフレームが出来たのはいいのですが、だいぶ予算がオーバーしてしまい、その上、写真よりフレームの方に人気が集まってしまうのではと、よけいな心配もしました。柔らかな自然のイメージと木のフレームがうまくマッチングしたと思っています。

パンフレットを作った理由は作品発表という形式をギャラリーだけで終わらせたくないと考えたからです。通常は一定期間ギャラリーで発表すれば、それで終わってしまうわけです。しかし撮影に5年かけて、発表は2週間ではあまりにも空しい、5年のリスクを2週間では解消出来ないものが残るとも考えたからです。金額の問題ではなく写真に対する私自信のこだわりからでもあります。こうしてパンフレットにしておけば会う人ごとに見せることが出来るし、何かのお礼に差し上げたり、欲しい人に譲ることも出来ます。事実様々なビジネスの中で私の写真に関心を示してくれる人も多く、この様な時にも便利だと考えたのです。制作に当たっては自分の写真に対する関わり方や、こだわりを出来るだけ正確に伝えられるようにしたいと考え、私の考え方を十分理解してくれるデザイナーにお願いしました。その時、印刷はダブルトーンにしたいということだけ伝えました。写真の下にデーター表を入れたのもデザイナーの案でした。こうして作っておけばゾーン・システムに、これから入りたい人にも、まだ少し迷っている人にも便利だと思ったのです。

今回の展覧会は平木先生に相談し、そのたびに助言を頂いておりました。ですからパンフレットの序文を書いて頂くことは私にとっては自然のことでした。そのおかげで展覧会の内容を、より高めることが出来たと思っています。川に気持ちを集中して撮影していた私は実は海のことなど全く考えていなかったのです。今、撮影している川が海につながっているという、このあたりまえのことが、まったくイメージの中に、なかったのです。この文章を読んで初めて川と海がイメージの中でつながりました。面白いことに川の水は無色透明にイメージするのに海は青にしかイメージ出来ないのです。森林や岩、石や砂など天然自然に抱かれ養分を吸収しながら、しだいに青に染まって行く、今そんなイメージで川から海を思い浮かべています。この文章を読んでから私は海のことが気になりだしているのです。

誰もいないギャラリーで一人自分自身の作品に囲まれている時の気持ちは展覧会でなければ味わえな

い気分です。一点、一点の作品から、その時の光、どんなことに注意して撮影に至ったのか全て思い出せます。三脚の位置やレンズのこと、メーターによるゾーンの位置づけ、道に迷ったこと、遠くで鳴く動物の声、寒さで指が動かずノートに書いた文字がぐにゃぐにゃに曲がってしまったこと、カメラを川の中へ落としてしまったこと、等、思い出せばきりがありません。変な生き物に遭遇したこと、足を岩にぶつけて三針ほど縫ったことも今ではいい想い出です。
今は自分自身との約束を果たせた思いでいっぱいです。しばらくは、この気分で行きたいなと思っています。しかしこの充実感もしだいに薄らいで行くことも分かっています。去年八ヶ岳で個展を行って以来、大きな個展はＰＧＩで開催してから、ずいぶん時間が立ってしまいました。出来ることであれば今後はもう少し早く発表していきたいなと考えています。
いくらかの主張と反省も含めて無事終了したことをここにご報告致します。
最後に、意思と意識にかかわらず私の展覧会に関わりあって頂いた多くの方々に御礼申し上げます。

中島　秀雄

研究会会員の継続と会費納入のお知らせ

皆様には益々ご健勝のことと思います。今年も残りわずかになって来ました。
早いもので研究会発足から一年になろうとしています、樹海撮影ではサリンを心配したり、銀行の倒産も社会を混乱させました。そうした様々な事件や社会の変化の中で急速に伸びているインターネット、そのような時代に、もはや入って来ています。
研究会としては、こうした社会の様々な変化や動きに動揺することなくゾーン・システム研究会を進めて行きたいと思います。しかし、この一年間試行錯誤しながら行って来たものの、なかなか忙しく、会員の皆様の期待に答えられず申し訳なく思っています。ご存じのように過日行われました、私の展覧会は会員の皆様の協力によって無事に終了させることが出きました。ちょうど研究会発足の年に展覧会を開催し皆様に鑑賞して頂けたことは、タイミングとして、とても良かったと感じております。ゾーン・システム研究会とはどんな会なのか、どんなスタイルで写真と関わって行くのか皆様に見て頂けたと同時に、外に対しても一つの答えを出したと思っています。
来年は、私が敷いたレールに乗って会員の皆様が走り始める年になります。しかし最初から難しいことは出来ません、基本的なスタイルやレールが提示出来れば良いと思います。どうぞ会員の皆様が自ら拘った写真に深い情熱を傾けて、素晴らしい写真を撮って頂きたいと思います。でも一人ではなかなか上手く行かないこともあるでしょう、多くの人が集まれば上手く行きます、この会は、その為に発足した会でもあります、その為には、どうしても会員皆様の情報や協力が必要です。どうぞゾーン・システム研究会の継続と年会費の納入の件、宜しくお願い致します。

ゾーン・システム研究会代表
中島 秀雄

カメラ雑誌の紹介

朝日ソノラマ社から現在発刊されているカメラレビュー「クラシックカメラ専科」No36 マミヤの全てに中島 秀雄の写真と記事が掲載されています。定価￥2500　ご希望の方は８掛で手に入りますのでゾーン・システム研究会事務局まで早めに申し込んで下さい。TEL&FAX 03-3499-1766 留守伝でも結構です。

年会費納入のお願い

※ゾーン・システム研究会も1996年1月29日で２期目を迎えます。つきましては、第２期運営にあたっての年会費を徴収したくお願い申し上げます。
期日は1996年1月中で、お願い致します。同封の払込取扱票と金￥10,000を添えて、最寄りの郵便局にてお支払い下さいますようお願い致します。

来年度の計画について

※年末最終の役員会を、代表者 及び各幹事で間もなく行います。今回の役員会は、一年間を振り返っての反省と来年２月の２期目を控え、大きな目標を掲げております。それはゾーン・システム研究会としてグループ展を開催することです。なにか大きな目標を持つことで会員の方々のグレードアップと、会員相互の団結力につながると考えております、そして活動を起こすことによってゾーン・システム研究会の存在を、もっと世の中の人に知ってほしいと思っています。その為の撮影会も何処で行ったら良いか思案中です。例えば、来年早々に何処か日本の島へ行くとか、海外遠征をするとか、本気に考えています。もし実行するのであれば、日本の島は1996年2月24日25日26日の日程で一泊２日組と二泊３日組の二班を計画しています。又、６月の上旬には、南フランス遠征を計画しています。まだ場所については検討前ですが、例えばリクビール、マルセイユ、エクサンプロバンス、ピレネー等です。このような内容で役員会が開催されます。この計画が成功しますように会員の皆様も1996年2月4日(日)の第２期総会では、前向きなご意見をお待ちしております。